

## 「土呂久の母」と慕われ

病院に見舞うたび、酸素ボンベから伸びた管につながられた体で、ヒ素の病気の苦しはおくびにも出さず、ひょうきんなこと言うて豪快に笑った。鉄砲かまえて鹿や鳥を撃った武勇伝の持ち主。樂天的で陽気な男勝りの公害闘争のリーダーじゃった。

小学生の健康優良児がヒ素鉱山のむら土呂久に嫁いで、



さとう  
佐藤

トネさん

「土呂久鉱山公害被害者の会」会長

肺炎のため 11月2日死去・92歳

呼吸器や耳鼻咽喉科や末梢神経の病気もちになった。「病気の原因はヒ素」の信念で、公害病申請を棄却した宮崎県相手に行政不服で闘った。俺もいっしょに県をとっちめて、「よう調べちくれた」と礼を言われたときは涙がこみあげた。「土呂久の母」として慕うたのはそれからじゃ。村人衆から「負けたら家がつぶれる」と言われた裁判に勝利して「地裁判決に従え」ち東京・新橋の鉱山会社前に座り込み、控訴の報せに「東京で骨を埋めることになりました。東京の皆さま、私たちが骨を拾ってください」と集会で訴えた。あん言葉には体がふるえたばい。「命あるうちの救済」を求めた最高裁和解では、時の流れを読んだ選択

で被害者をまとめたよね。「安産を願うてお腹をさすったとよ」ち見せてくれた熊の腕。アジアの地下水ヒ素汚染地からやってきた人たちが「土呂久をへり返さないで」ちゅう呼びかけ。バングラデシュでヒ素汚染対策に専念すると決めた俺を「土呂久から出張してきてください」ち送ってくれた。

訃報を聞いた10日後、バングラデシュのシャムタ村でトネさんと同じ慢性気管支炎のヒ素中毒患者が、3歳の息子を残して死んだ。バングラ出張14年、解決の道はまだ見えん。俺の出張を解いて「帰国していいよ」ち言うてくれる人は、この世にゃおらんごつなつた。

(記録作家・川原一之)